



史傳

津崎矩子 (ついき)

下村三四吉

前まへ回くわいに述のべたる將軍せうぐん養君やうくん問題もんだいに關くわんする運動うんどうの京きやう都とに盛さかなるに當あたりて、近衛このゑ忠烈たひつらう公こうは已すでに左大臣さだじんに進すすみて、關白くわはく候補こうほの位地ゐちに立たてり。位地ゐち高たかきが上うへに主上しゅじやうの信任しんにん甚はなだ深ふかく、望のぞを天下てんかより屬ぞくせられぬ。この家いへは、我わがが國初こくしう以來いらい常に皇室くわつしつと相關あひかん聯れんして休戚きゅうせきを共ともにせる藤原ふじはら氏しに出いで、公こうが忠貞ちゆうていの節せつ、憂國ゆうこくの念ねんは、かゝる時勢じせいに遭遇ざうごうして愈いく固かたく、益ますと盛さかんにして、京きやう都とに於かける尊王そんわう攘夷じやうい黨たうの推戴すゐたいす

るところとなれり。されば、公こうが朝廷てうていの上うへにて要よう事じ繁多はんたにして匆忙もうぼうを極きまめらるるは、言いふまでもな
く、公退こうたいの後のちは有志ゆうしの士しその門もんに出入しゆつしゆするもの常つねに絶たえざりき。村岡むらおかは、幼せうより近衛このゑ家に仕つかへて、深ふかく忠烈ちゆうりつ公こうの愛用あいようを受け、忠實ちゆうじつかはることなく、また夙つとに干事かんじを憂うれひ、義侠ぎげつの氣き、丈夫ぢやうぶも及およばざる概おほあり。故ゆゑに志士ししの公こうに依よらんとするものは、先まづ村岡むらおかに依頼いらいしてその執成しつせいを得えたり。當時たうじ公こうを慰なぐさめ、公こうを輔たすけまた、公こうと民間みんかんの志士ししとの間の橋梁けりやうとなりしは村岡むらおかの方實ちかじつに多おほかりき、村岡むらおか時に、年とし既に七十ななじに餘あまり、意氣いき壯さうなりといふべし。
かくて、西郷隆盛さいかうたかもり、橋本左内等はしもとさなうちらうは、堀田正篤ほりだしげふたが米國べいこくとの通商條約締結つうしやうじやくていけつの勅許奏請ちよくしそうせいのために上京じやうきやうせる間に(安政五年二月より四月初に至る)、近衛公このゑこうを初めとして、鷹司三條等たかつかさ じやうとうの諸公卿しよこうけいにも説とき、

一橋慶喜が養君として決定せらるるべし。内勅が堀田閣老に傳へらるるまでに運びたりにし、當時關白の要職に在りし九條尙忠は紀州派に勸説せられて紀州養君の説に左袒せしかは、一橋派の苦心も甚だ望少なきに至りぬ。

堀田閣老は條約締結の勅許を得ずして四月二十日に江戸に歸れり。堀田は將軍養君問題につきては一橋派なるを以て、紀州派は前にいへるか如く種々の謀計を運らして一橋派を妨げ、將軍家定をして慶喜を厭嫌するに至らしめ、また首席の閣老たる堀田を制してその勢力を挫がしめんため、近江彦根の藩主井伊直弼を擧げて大老に任せしめたり。これ方に堀田が歸府せしより僅に三日の後なり。直弼は徳川氏隨一の功臣の家より出で、その門閥、その地位、頗る高く、豪膽にして、

勇決果斷の資に富めり。幕府大奥の推薦するところとなりし直弼が、將軍養君の問題につきて、いふまでもなく、紀州派を庇護して一橋派を抑壓せしより、局面は更に一變せり。

井伊直弼の就職の初に當り、養君問題の外に、外交問題は焦眉の急に迫れり。由て「ハルリス」に對しては、條約調印の延期を請求し置き、直に養君治定の事に従ひ、六月二日を以て記伊慶福を迎へ立つるの議を決し、同廿二日京都よりその勅許を得たり。こゝに於て、廿五日、養君決定の旨は、公然天下に告示せられ、慶永、齊彬、橋本、西郷等の苦心も、終に水泡に歸しにき。これにつきて大に盡力せりし村岡が失望や如何なりけん。

一波未だ収まらずして、一波更に來る。養君問題と相前後して、彼の通商條約調印の大事件は起

りぬ。此時「ハルリス」は上言して、英佛の二國軍艦四十餘隻を卒る清國に於ける戰勝の餘威を以て來りて我が國に臨まんとすることを告げ、早く條約を結定するの利を説きたり。應接使并上清直岩瀬忠震の二人は、終に去冬定むる所の通商條約草案に就きて月日を記入し、調印を終れり、時に六月十九日なり、幕府の久しく憂慮せりし條約調印の事、こゝに至りて、終に斷然たる處置を見るに至れり。

井伊直弼は、勅許を待たずして通商條約に調印したるさへあるに、その次第を奏問するに特使を派遣せず、六月廿一日宿次奉書によりて之を達せり。こは今日の郵便の如きものなり。水戸齊昭、尾張慶恕、松永慶永等は、打揃うて登城し、直弼に對して、はげしく違勅の不可を詰責攻難し、尊

攘の志士は慨然として起ち、聖上かしくも「位山、神の心やいかならん、愚なる身の居るもかしこし」また「茂り合ひしげりあひたるばらすゝ、あるにかひなき武藏野の原」と震怒あらせられ、朝議は沸騰し、幕府は上下非難の中心となりぬ。正に是れ「山雨欲來風滿樓」の狀景

六月廿九日、三家或は大老の内にて早々上京せしむべき旨の勅書は、江戸に向つて飛びぬ。折も折とて、將軍家定はその七月四日に薨去せり、露國の使節は江戸に入り、英國の軍艦は品川灣に進ませり。内外の多事言ふべからず。直弼は勅命の趣きは必ず水戸齊昭の手入れに出でたるものならんと思惟し、將軍の喪は秘して之を發せず、同じ六日將軍の命と稱して突然齊昭を駒籠の邸に移し、尾張侯慶恕、越前侯慶永に退隱謹慎を命じ、

一橋慶喜の登城を停止したり。大波瀾の起るべき
機運は、刻々に其勢を高め來れり。(つづく)

(正誤) 前號の本文中、三十八頁下段の五行に「三橋の一
たる」さあるは、「三卿の一たる」の誤植。また四十頁下段
の十二行「天章院夫人」は、天璋院夫人」の誤植。

日本のこのくにふりのかしこさも

やまごころばの上に見えつく (近衛忠熙)

月はなほ春のならひにかすむ夜も

さやかに見ゆる花のいろかな (同上)

うしと思ひうれしと思ふもこひ慕ふ

こゝろひさつの迷ひなりけり (同上)

盡し忠全、節身魚、耻、懐、古傷、今悶難、禁、(橋本左内)
囊裡疏書悉心血、袖中詩卷半精神 (同上)



落花文苑

鷺水

池の花

池のかなたの

すがたをうつす

そよとの風に

ヒラ／＼と散る

野の花

暮れゆく春の

ちりにし花の

戀しき野邊を

こゝにも迷ふ

水の面に

稚子ぞくら

はかなくも

うつの世や』

夕まぐれ

跡とひて

とめ來れば

蝶胡蝶』